

親鸞における生死出離の道(中) — 「横超断四流」の意義

鍋島直樹

Shinran's Perspectives on The Way of Freedom from Birth and Death (2): The Significance of "Transcending Crosswise, Cut off the Four Currents"

Naoki Nabeshima

序

本研究の目的は、親鸞が明かした生死を出離する道について、親鸞自身の言葉とその教理的典拠に基づいて説明するものである。先行研究の浅井成海「親鸞の生死観」<sup>1</sup>と川添泰信「親鸞の基点―生死観について」<sup>2</sup>では、親鸞の生死観を、(1)無常としての生死、(2)迷いとしての生死、(3)罪業の自覚としての生死、(4)生死即涅槃としての生死、(5)利他教化地としての生死に分類して説明した。こうした先哲に学びつつ、親鸞の生死観を、生死輪廻の現実と出離の両面から考察している。親鸞が生死の現実をふりかえったキーワードには、(1)生死輪転、(2)生死苦海、(3)生死罪濁、(4)生死無常などがある<sup>3</sup>。親鸞が生死を出離する道を示したキーワードには、(1)出離生死<sup>4</sup>、(2)度生死海、(3)流転生死を超え離れる、(4)横超断四流、刹那超越成仏之法、(5)信心あらんひと空しく生死にとどまることなし、(6)永く生死を捨ててはてて自然の浄土に至る、(7)生死の長き夜すでに暁になりぬ、生死の闇に惑わざる、(8)証知生死即涅槃、(9)入生死菌・回入生死という利他教化・還相摂化を表す用語がある。本論では、親鸞における生死の超越、横超断四流の真意を明らかにしたい。

## 一、度生死海

——生死出離とは、阿弥陀仏の本願力によって迷いの暴流や苦海を渡ることである。

生死を超える道について、經典では、生死の流れを度す、生死の海を渡ると説かれている。親鸞の尊重した經典に、次のような用例がある。

願我作仏 齊聖法王 過度生死 靡不解脫（『無量寿經』、大正藏一二卷二六七b、『浄土真宗聖典全書』一卷二二頁）

設令滿世界火過此中得聞法 會当作世尊將度一切生老死（『平等覺經』 大正藏十二卷二八九a、「信卷」引用、『聖典全書』二卷九八頁）

被弘誓德鎧 為度生死故（『華嚴經』、大正藏九卷四二二a）

救無量苦度生死流（『華嚴經』、大正藏九卷四八九c）

得不退轉生如来家 度生死海速得如来一切智海（『華嚴經』、大正藏九卷六九〇c）

汝今欲度生死大河 我能為汝作大船師（『涅槃經』、大正藏一二卷四九〇a）

このように無明煩惱によつて生まれ変わり死に変わつて迷いを繰り返す世界を、苦悩の濁流や果てしなき煩惱の海にたとえ、その迷いの輪廻を超えてさとりに至ることを、苦悩の海を渡ると經典に説かれている。

では、いかにして愚者は生死の苦海を渡ることができるのか。親鸞は、浄土教の先師を訪い、その答えを『無量寿經』に見出した。

願はくは我仏となり、聖法王に齊しく、生死を過度して解脱せざることなからしめん（『無量寿經』讚仏偈、『聖典全書』一卷二二頁）

我をして世に於いて速やかに正覚を成じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめたまへ。（『無量寿経』卷上、『聖典全書』一卷二二頁）

かならず当に世尊となりて、將に一切生死を度せむとすと。（『平等覚経』、「信卷」引用、『聖典全書』二卷九八頁）  
あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生れんと願ずれば、即ち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と正法を誹謗するものとをば除く。（『無量寿経』本願成就文、「信卷」引用、『聖典全書』二卷六八頁）

ここに読み解かれているように、ひとえに衆生一人ひとりの生老病死にまつわる苦悩の根本を抜くことを法蔵菩薩が誓い、その誓いを成就したのが阿弥陀仏の本願である。あらゆる衆生が阿弥陀仏の名号を聞き、名号に込められた仏願の由来と救済のはたらきを聞いて疑いなく信じ喜ぶ時、その信心は阿弥陀仏が至心をもつて廻向されたものであるから、必ず浄土へ往生させんとする仏の願いに支えられて、往生すべき身と定まり、不退転に住すると親鸞は受けとめている。親鸞は、本願成就文の真意をこう説明する。

真実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御ころのうちに撰取して捨てたまはざるなり。撰はをさめたまふ、取はむかへるとと申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。（『一念多念文意』、『聖典全書』二卷六六三頁）

如来選択の願心より真実信心を恵まれ、阿弥陀仏に迎えられ見捨てられることはない。仏の心に撰取された時、今ここからだちに正定聚に住すと親鸞は明かした。親鸞は無碍光仏の大悲に抱かれて生死を出離する道を見出した経験を、「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」（「化卷」後序、『聖典全書』二卷二五四頁）と記している。したがって自力の計らいによる雑行を棄てて、愚かな自己を撰取して捨てない本願に帰すところに、生死輪廻を渡る道が開かれる。本願の救いの

結晶である名号を称え、如来の真実心が信心となって愚かな自己に満入していることを疑いなく信じる時、不退転に定まり、慚愧と感謝の喜びがあふれてくる。

親鸞は、こうした『無量寿経』の救済観を支えにして、阿弥陀如来の本願の船のみが、生死の苦悩に沈む人々を乗せて、安楽浄土に渡すことができる<sup>7</sup>と明かした。

生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける(『高僧和讃』)

龍樹讚(七)、『聖典全書』二卷四〇六頁)

親鸞は、龍樹の教理を典拠にしてこの和讃を記した。

彼の八道の船に乗じて、よく難度海を度す。自ら度しまた彼を度せむ。(『十住毘婆沙論』易行品、「行巻」引用、『聖

典全書』二卷二四頁、大正蔵四六卷四三c)

龍樹の表した「難度海」を親鸞は「生死の苦海」といい、「八道の船」、涅槃に至る八聖道の船を、親鸞は「弥陀弘誓のふね」として受けとめている。

また、阿弥陀仏の本願を生死大海の船に喩える表現は、法然にも見られる<sup>8</sup>。法然は『無量寿経釈』に「以智慧船筏渡生死大海、挑般若明燈、照無明長夜<sup>9</sup>」、すなわち、「智慧の船筏をもって生死の大海を渡り、般若の明燈をかかげて無明長夜を照らす」と記している。

こうして親鸞は、法然の教えを継承し、聖覚の法語「誠知、無明長夜之大燈炬也。何悲智眼闇、生死大海之大船筏也。豈煩業障重」を引用して<sup>7</sup>、阿弥陀仏の本願力は生死大海の船や筏であると説明する。

「誠知無明長夜之大燈炬也何悲智眼闇」といふは、「誠知」はまことにしりぬといふ、弥陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしびなり。なむぞ智慧のまなこくらしとかなしまむやおもへと也。「生死大海之大船筏也豈煩業障重」といふは、

弥陀の願力は生死大海のおほきなるふね・いかだ也。極悪深重のみなりとなげくべからずとのたまへるなり。「倩思教授恩徳実等弥陀悲願者」といふは、師主のおしえをおもふに、弥陀の悲願にひとしとなり、大師聖人の御おしへの恩おもくふかきことをおもひしるべしと也。「粉骨可報之摧身可謝之」といふは、大師聖人の御おしへの恩徳のおもきことをしりて、骨を粉にしても報ずべしとなり、身をくだきても恩徳をむくふべしとなり。（『尊号真像銘文』正嘉二年本、建長七年本、『聖典全書』二卷六四八頁）

したがって親鸞は、龍樹『十住毘婆沙論』、法然の『無量寿経釈』、聖覚の法語を典拠とし、『高僧和讃』龍樹讃、『尊号真像銘文』に、「弥陀の本願力が生死大海の大きな船、筏となつて苦悩する人々を乗せて救い、必ず彼岸に渡してくれる。だから極悪悪人の身であることを悲しまなくていい」と明かした。仏に必ず救われる喜びと弥陀の悲願に等しい師法然の教えを心の支えにして、報恩感謝の大道をひたむきに歩みたいと親鸞は表白している。

また親鸞は、智慧浅く罪重き人の救いについて、こう歌っている。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ（『正像末和讃』（三六）、

『聖典全書』二卷四八六頁）

この『正像末和讃』には主語が書かれていないが、親鸞は『尊号真像銘文』に「弥陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしびなり」と記し、文明五年蓮如上人開版本には、「無明長夜の灯炬」の左訓に、「ツネノトモシビヲウトイフ オホキナルトモシビヲウトイフ ツネノトモシビヲミダノホンダワンニタトヘタマフナリ」（『聖典全書』二卷四八六頁）と記されている。これらの文証により、灯は常に灯りつづけている明かり、炬は大きなかがり火を指し、心の奥底にある闇を照らす灯りを、阿弥陀仏の本願に喩えていることがわかる。したがって煩惱の闇がどれだけ深くても、弥陀の誓願が長い夜を破る灯りであるから、自らの智慧が浅いと悲しまなくていい。弥陀の誓願は生死の苦海に沈む人々を乗せて救う船であるから、自らの罪に押

しつぶされずに誠実に生きよう。そのように親鸞は人々を慰め勇気づけた。

さらに、生死の海に溺れる有情を、阿弥陀如来が呼びつづけ本願の船に乗せて救うという親鸞の和讃もある。

弥陀・観音・大勢至 大願のふねに乗じてぞ 生死のうみにうかみつゝ 有情をよばふてのせたまふ

弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜんひとはみな ねてもさめてもへだてなく 南無阿弥陀仏をとなふべし（『正像末和讃』

（五三）（五四）、『聖典全書』二・四九五頁）

「阿弥陀如来と観音菩薩と大勢至菩薩は、本願の大きな船に乗って生死の迷いの海に浮かび、有情を呼びつづけて本願の船に乗せてくれる。だからこそ阿弥陀如来の大悲の誓願を深く信じる人はすべて、寝ても覚めても変わりなく、常に南無阿弥陀仏を称えよう」という意である。この有情を呼びつづけるとは、衆生の称える念仏が、阿弥陀仏の呼び声となって心に届くことを意味する。この和讃は、源信の『往生要集』に引用される迦才『浄土論』巻下を典拠にしている。

『無量清浄覚経』に云はく、「阿弥陀仏、観世音・大勢至と、大願の船に乗りて生死の海に汎びて、この娑婆世界に就きて、衆生を呼喚して大願の船に上せて、西方に送け著けしめたまふ。もし衆生あへて大願の船に上るは、並びに皆去ることを得」と。これはこれ往き易きなり。『心地観経』の偈に云く、「衆生は生死海に没在して、五趣に輪廻して出づる期なし。善逝つねに妙法の船となり、よく愛流を截りて彼岸に超えしめたまふ」と。念ふべし、「われ、いづれの時にか悲願の船に乗りて去らむ」と。（『往生要集』巻中、大正藏八四卷五八c、『聖典全書』一卷一一八〜一一九頁）

阿弥陀仏と観音菩薩と勢至菩薩が、大悲の願船に乗って娑婆世界に着き、苦悩する衆生に呼びかけて悲願の船に乗せ、極楽世界に送り届けてくださると源信は明かしている。如来の呼び声を聞き、悲願の船に乗ってこそ、生死輪廻の流れを断ち切り、安心して彼岸に往くことができる。源信はいう。

この如来の招喚する声を聞き、弥陀の願行具足した名号を称えて救われる道を、親鸞は「行巻」六字釈で示し、また、善導

の二河白道の比喻や慈愍の『般舟三昧経』によって明らかにする。

帰命は本願招喚之勅命なり。（「行巻」六字釈、『聖典全書』二卷三五頁）

親鸞左訓「帰説 ヨリタノムナリ」「帰説 ヨリカゝルナリ」「招喚 マネキヨバウ」「勅命 オホセ」（『聖典全書』二卷三五頁）

正に念仏法門開けるに値へり。正に弥陀の弘誓の喚びたまふに値へり。（「行巻」、『般舟三昧経』引用、『聖典全書』二卷三八頁）

このように帰命は、弥陀の本願を究極的な依りどころとして信じまかせる心であり、弥陀の本願が衆生を招喚する仰せであると親鸞は明かした。自己の称える念仏がそのまま阿弥陀仏の自己を招喚する声なのである。またその典拠として、『大阿弥陀経』巻上の経文を、親鸞が「真仏土巻」で次のように左訓している箇所がある。

阿弥陀仏の声を聞きて 「声」の左訓「ミナ」（『聖典全書』二卷一五八頁）

ここに親鸞が、名号は弥陀の声であり、自らの称える名号を弥陀の喚ぶ声として聞いていたことがわかる。

親鸞は、善導の二河譬を「信巻」に引用し、弥陀が苦悩の衆生を招喚すると教える。

衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒してみづから纏ひて、解脱するに由なし。仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまふによつて、いま二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念念に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの国に生ずることを得て、仏とあひ見て慶喜すること、なんぞ極まらんと喩ふるなり。また一切の行者、行住座臥に三業の所修、昼夜時節を問ふことなく、常にこの解をなし、常にこの想をなすが故に、回向発願心と名づく。また回向といふは、彼の国に生じをはりて、還りて大悲を起して、生死に回入して衆生を教化する、また回向と名づくるなり。（『聖典全書』二卷七七頁）

さらに親鸞は、『一念多念文意』において二河譬を説明し、凡夫の救われる道を示した。

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらはれたり。かゝるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やうやうづゝあゆみゆけば、無礙光仏のひかりの御こころにをさめとりたまふがゆへに、かならず安樂浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚のはなに化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。これを致使凡夫念即生と申すなり。二河のたとへに、「一分二分ゆく」（散善義）といふは、一年二年すぎゆくにたとえたるなり。諸仏出世の直説、如来成道の素懐は、凡夫は弥陀の本願を念ぜしめて即生するをむねとすべしとなり。〔聖典全書〕二卷六七六〜六七七頁）

生きることは寂しくつらい。思うようにならずに苛立ち、他者と反目して孤立する。苦しみで何も言えず、胸が押しつぶされそうになる。しかし何かにとらわれてしか生きられない我々を常に照らし護つて見捨てない弥陀の本願がある。本願の道を信じ念仏して歩むことが、仏の心に摂取されて生き、必ず浄土に到る道を開く。なぜなら、念仏は私が称える念仏でありながら、阿弥陀仏が大慈悲心をもつて私を招喚する声であり、釈尊や諸仏が念仏の道を讃嘆して念仏者を護り、私の往く浄土への道が確かであることを指し示してくれるからである。弱く愚かな人をこそ、仏の本願は摂取して捨てることがない。足元に流れる怒りや憂いの川に流されないで、ただ一心に本願に帰依し、仏に招喚されて念仏を称え、本願の白道を一步一步渡っていくことが、ついには安樂浄土に到り、生死を出離する道となる。親鸞は、善導の二河譬の「一分一分ゆく」を「一年二年すぎゆく」と受けとめている。現生で、弥陀の本願を信じて念仏を称え、悩みながらも年年歳歳歩んでいくことが、そのまま阿弥陀仏の心に常に摂取され、安心して生き抜く道を開き、当来には、正覚の華より化生して、如来と同じ大涅槃を開くことができる。親鸞は明かしている。限りなき如来の大悲が現在の人生を支えているから、煩惱に縛られた自らの愚かさを慚愧し、自



他の安穩を願って生きようとする。ついには迷いの時を超えて、臨終の一念に無上大涅槃に至り、大いなる慈しみの心を起こして生きとし生けるものを救うことができる。そういう明るい未来が開かれると親鸞は伝えている。

## 二、流転生死を超え離れる

——流転生死を超えるとは、弥陀の本願に一心に帰命して念仏すれば、本願力によって流転輪廻している状態を「超過」「超出」「超絶」して、臨終の一念に迷いの世界を離れ去り安楽浄土に往生して、無上大涅槃を「超証」できることである。

まず、「超」の字義は、召の転音が音を表し、『説文解字』二上に「跳ぶなり」と記され、高く飛び上がる、飛び越えて前に出る、飛びぬける、かけ離れる（超絶）、すぐれる、世俗の俗事から離れる、他に隔絶するという意がある。『俱舍論』における「超」は、中間を超えて完全な涅槃に入ることを意味する<sup>10</sup>。次に、「越」の字義は、戌が音を表し、『説文解字』二上に「度（わた）るなり」と記され、こえるの意の語源「踰」からきていて、超越、物の上を通っていく、度を過（こ）す（僭越）、年月を送る、すぐれるという意がある<sup>11</sup>。

生死を超えろという表現は、經典に次のような用例がある。

超生死（『華嚴經』、大正蔵一〇卷七〇四 a 等）

超過世間諸所有法（『無量寿經』、大正蔵十二卷二六六 b、『聖典全書』一卷十八頁）

於是法蔵比丘 具足修滿如是大願 誠諦不虛超出世間深染寂滅（『無量寿經』、大正蔵十二卷二六九 c、『聖典全書』一卷三一頁）

我、超世の願を建つ、かならず無上道に至らん。（『無量寿經』重誓偈、「信卷」引用、『聖典全書』二卷九七頁）

必ず超絶して去つることを得て安養国に往生して、横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉ぢ、道に昇るに窮極なからん。(『無量寿経』、「信巻」引用、『聖典全書』二卷九七頁)

このように生死を超えるとは、法蔵菩薩が世俗の迷いを超える誓願を建てて、この上ない仏道に至ることである。また、生死を超絶するとは、迷いの世界を去つて安樂国に往生し、横に地獄・餓鬼・畜生・人間・天人という五悪趣の迷いを断ち切ることである。親鸞は、こうした『無量寿経』の教説に依りながら、本願力によつて生死を超える道を明かしている。

『無量寿経』下巻に「必得超絶去往生安樂国 横截五悪趣悪趣自然閉 昇道無窮極易往而無人 其国不逆違自然之所牽」と説かれる経文の真意を、親鸞は『尊号真像銘文』本にこう説明する。

「必得超絶去往生安養国」といふは、「必」はかならずといふ、かならずといふは定まりといふところ也、また自然といふところ也。「得」はえたりといふ。「超」はこえてといふ。「絶」はたちすてはなるといふ。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さるといふなり。娑婆世界をたちすてて流転生死をこえはなれてゆきさるといふ也。安養浄土に往生をうべしと也。……横超はすなはち他力眞宗の本意也。「截」といふはきるといふ、五悪趣のきづなをよこさまにきる也。「悪趣自然閉」といふは、願力に帰命すれば五道生死をとづるゆへに自然閉といふ。「閉」はとづといふ也。本願の業因にひかれて自然にむまると也。……中略……眞実信をえたる人は大願業力のゆへに、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひかるるゆへにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきはまりなしとのたまへるなり。しかれば「自然之所牽」と申すなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。これを「牽」といふなり。「自然」といふは行者のはからひにあらずとなり。(『聖典全書』二卷六〇八〜六一〇頁)

誰しも苦しみの中にあり、だから苦しみを超えた眞の安らぎを求めて生きている。阿弥陀仏の本願力に一心に帰命すれば、必ず流転輪廻の生死を超え離れて娑婆世界を去り、自然に五悪趣の迷いが閉じて、本願の業力にひかれて自然に安養浄土に生

まれ無上大涅槃に至ると親鸞は明かした。生死の超越は、自力の計らいによって達成することはむずかしい。しかし、如来の願力に帰命して念仏すれば、本願力の自ずからなる救いのはたらきに導かれて、五悪趣のきづなが横さまに断ち切られ、生死の迷いを超絶することができるのである。

### 三、横超断四流

——親鸞は、生死を超える道を「横超」として明かした。『尊号真像銘文』末に、「横超」といふは、「横」は如来の願力、他力とまふすなり。「超」は生死の大海をやすくこえて無上大涅槃のみやこにいるなり」（建長本、親鸞八三歳、『聖典全書』二卷六五三頁）と記されている。ここより「横」は本願他力、「超」は生死の苦海をたやすく速やかに超えてこの上ない涅槃の浄土に入ることであると親鸞は明示した。横超は、教に約して言えば、如来の本願力による真実の救いの道を表し、信心に約して言えば、如来の本願力回向による金剛の信心を意味する。

まず、横超に関連する表現は、経典などにこう説かれている。

必得超絶去往生安楽国 横截五恶趣恶趣自然闭 昇道無窮極。〔無量寿経〕卷下、大正蔵十二卷二七四b、「信卷」引用、

『聖典全書』二卷九七頁、『浄土文類聚鈔』引用、『聖典全書』二卷二六四頁）

可得超絶去 往生阿弥陀仏国 横截於五恶道 自然閉塞 〔大阿弥陀経〕、大正蔵十二卷三一c、「信卷」引用、『聖典全書』二卷九七頁）

道俗時衆等 各発無上心 生死甚難厭 佛法復難欣 共発金剛志 横超断四流 願入弥陀界 帰依合掌礼 〔善導〕『観経四

帖疏』玄義分「帰三宝偈」、大正蔵三七卷二四五c、「信卷」引用、『聖典全書』二卷九十頁）

親鸞は、『無量寿経』と善導「帰三宝偈」の教説を典拠とし、横超を、本願他力の教えとして、また、本願力回向の信心として説き明かした。

(一) 横超とは、迷いの暴流を渡ることのできる選択本願の教えである。横超とは、如来の本願によつて、すべての衆生が平等にさとりを開くことができる唯一眞実円満の教えである<sup>12)</sup>。

頓に三有の生死を断絶す。故に断といふなり。四流とは則ち四暴流なり。また生老病死なり。(「信卷」横超断四流釈、『聖典全書』二卷九七頁)

ここで親鸞は、本願力によつて速やかに欲界・色界・無色界の三界の迷いを断絶し、欲暴流・有暴流・見暴流・無明暴流という煩惱の四暴流<sup>13)</sup>や生老病死苦の四流を横断できると明かしている。

横超断四流といふは、横超とは、横は豎超・豎出に対す、超は迂に対し回に対するの言なり。豎超とは大乘眞実の教なり。

豎出とは大乘権方便の教、二乗・三乗迂回の教なり。横超とはすなはち願成就一実円満の眞教、眞宗これなり。またまた横出あり。即ち三輩・九品・定散之教、化土・懈怠、迂回の善なり。大願清浄の報土には品位階次をいはず。一念須臾のあひだに、速やかに疾く無上正眞道を超証す。故に横超といふなり。(「信卷」横超断四流釈、『聖典全書』二卷九六頁)

横超とは、本願を憶念して自力の心を離る、これを横超他力と名づくるなり。これ即ち専のなかの専、頓の中の頓、眞の中の眞、乗の中の一乗なり。これ乃ち眞宗なり。(「化卷」、『聖典全書』二卷一九七頁)

また『愚禿鈔』でも、親鸞は二双四重判を示し、横超とは選択本願であると説く。

横超 選択本願・眞実報土・即得往生也(『愚禿鈔』上、『聖典全書』二卷二八三頁)

横超 如来の誓願他力なり。(『愚禿鈔』下、『聖典全書』二卷二九五頁)

さらに「正信念仏偈」には、弥陀の第十八願を横超の大誓願と親鸞は表現する。

修多羅によりて真実を顕して、横超の大誓願を光闡す。(「行卷」、『聖典全書』二卷六二頁)

このように親鸞は、仏教における涅槃への仏道を堅超・堅出・横超・横出の二双四重判として整理し、四つの道すべてが成仏道であると認めつつ<sup>14</sup>、その中でも、横超は本願が成就し、すべての衆生が平等に涅槃を開ける唯一真実円満の教説であると明かした。なぜなら横超他力の教えは、本願を憶念して自力の執心を離れる道であり、専修の中の専修、頓教の中の頓教、真実の中の真実であり、極悪のものをはじめ、一切の衆生を平等に救い、浄土に渡して無上涅槃に至らしむ乗の中の一乗、往生浄土の真実教だからである。横超他力の教えが「乗の中の一乗」であるという意味は、行卷「一乗海釈」に示されている。大乘は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。(『聖典全書』二卷五四頁)

機縁に応じて、二乗、三乗のごとき種々の法が説かれるが、大乘の本意は、すべての者がさとることのできる絶対唯一の教え、一乗にある。一乗とは、一切衆生が弥陀の本願力によつて生死を超えて平等に無上涅槃に至れる誓願一仏乗である。しかも一乗であるからこそ二乗、三乗を排除しない。二乗・三乗の教法も誓願一仏乗に包摂される視座が、この一乗海釈に明示されている<sup>15</sup>。そうした一乗の包摂性は、次の和讃にも見られる。

本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して 煩惱・菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ (『高僧和讃』(三二)、『聖典全書』二卷四二〇頁)

円とは、円融無碍、頓とは、頓極頓速を意味する。本願円頓一乗とは、名号に仏の善根功德が円かに満ち、名号を聞いて信じるものを等しく頓速に救う本願一乗の教えである。欠けめがなく速やかな救いのはたらきをもつ本願の一乗法は、五逆や十悪の罪人もみなすべて等しく撰取すると信知し、大悲の中で自らが慚愧されると、煩惱はそのまま菩提のさとりとなり、凡夫も弥陀と同体のさとりを開くことができると親鸞は明かしている。親鸞は、「円頓」に左訓して、「ハチマンシヤウゲウノスベ

テスコシモカクルコトナキヲエンドトマフスナリ」(『眞宗聖典全書』二卷四二〇頁)、すなわち、「八万聖教のすべて少しも欠くることなきを円頓と申すなり」と記し、あらゆる聖教がすべて本願一乘に満たされ、包摂されていることがわかる。

さらに、親鸞は、横超の白道を「本願一実の直道」ともいう。

道は則ちこれ本願一実の直道、大般涅槃、無上の大道なり。(『信卷』、『聖典全書』二卷八九頁)

万行諸善の小路より 本願一実の大道に 帰入しぬれば涅槃の さとりはすなはちひらくなり(『高僧和讃』曇鸞讚(五

三)、『聖典全書』二卷四三〇頁)

この親鸞の教説を承けて、覚如は、本願による救いを「横超の直道」と表現した。

ただ男女・善悪の凡夫をはたらかさぬ本形にて、本願の不思議をもつて生るべからざるものを生れさせたればこそ、超世の願ともなづけ、横超の直道ともきこえはんべれ。(『改邪鈔』、『聖典全書』四卷三二〇～三二二頁)

「横超の直道」とは、弥陀の本願他力に支えられて生死を超える道であり、涅槃に直結する道である。横超の直道は、時間のかかる迂回路ではない。如来の本願によるから速やかに涅槃に至れる大道である。

(二) 横超とは、如来の本願力によって廻向された信心である。如来より恵まれた横超の金剛心は、仏にならんと願う願作仏心、大菩提心であり、同時に、衆生を迷いの世界から涅槃の浄土に渡らせる度衆生心である。

菩提心について二種有り。一つは豎、二つは横……中略……横超とは、これすなはち願力回向の信樂、これを願作仏心といふ。願作仏心すなはちこれ横の大菩提心なり。これを横超の金剛心と名づくるなり。……中略……欣求淨利の道俗、深く信不具足の金言を了知し、永く聞不具足の邪心を離るべきなり。(『信卷』菩提心釈、『聖典全書』二卷九二頁)

ここで親鸞は、仏教において豎超、豎出、横超、横出の菩提心があるが、横超の菩提心は本願力回向の信樂であり、願作仏心であると定義している。本願を聞かずに疑い計らう邪心を離れるべきであり、本願を聞信することが生死を超えることにな

ると明かしている。

念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。（「信巻」便同弥勒釈、『聖典全書』二巻一〇三頁）

この一心は横超の信心なり。横はよこさまといふ、超はこえてといふ、よろづの法にすぐれて、速やかに疾く生死海をこえて仏果にいたるがゆへに超とまふすなり。これすなわち大悲誓願力なるがゆへなり。この信心は撰取のゆへに金剛心となれり。これは『大経』の本願の三信心なり。この眞実信心を世親菩薩（天親）は、「願作仏心」とのたまへり。この信樂は仏にならんとねがふと申すところなり。この願作仏心はすなはち度衆生心なり。この度衆生心と申すは、すなわち衆生をして生死の大海をわたすところなり。この信樂は衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心なり、大慈大悲心なり。……中略……釈迦は慈父、弥陀は悲母なり。われらがちゝはゝ、種々の方便をして無上の信心をひらきおこしたまへるなりとしるべしとなり。……中略……他力の三信心をえたらんひとは、ゆめゆめ余の善根をそしり、余の仏聖をいやしうすることなかれとなり。（『唯信鈔文意』親鸞八五歳、『聖典全書』二巻七〇五〜七〇八頁）

このように横超の信心とは、如来の本願力によつて煩惱具足の凡夫に廻向された金剛の信心である。如来の本願力回向によつて恵まれた金剛の信心だからこそ、人々は分け隔てなく共に浄土への道を歩み、生死の迷いを超えて、臨終に無上大涅槃を証することができる。如来の願心より発起した横超の金剛心は、仏に成らんと願う願作仏心、大菩提心であり、同時に、衆生を迷いの世界から涅槃の浄土に渡らせる度衆生心である。だからこそ、横超他力の信心を得た人は、他の善根や他の仏教の聖道を見下してはならないと親鸞は教えている。

#### 四、刹那超越成仏之法―超越の真意

親鸞は、「信巻」菩提心積で、信心は本願力回向の横超の菩提心であることを明かした。その論証として、元照『阿弥陀経義疏』とその門弟の戒度が註釈した『阿弥陀経義疏聞持記』を引用する。そこに「超越」の語が使われている。

念仏法門は、愚智豪賤を簡ばず、久近善悪を論ぜず、ただ決誓猛信を取れば、臨終悪相なれども、十念に往生す。此れ乃ち具縛の凡愚、屠沽の下類、刹那に超越する成仏の法なり。（「信巻」、『阿弥陀経義疏』引用、『聖典全書』二卷九二頁）

具縛の凡愚 二惑全く在るが故に。屠沽の下類、刹那に超越する成仏の法なり。一切世間甚難信なり。屠はいはく殺を宰る。沽は即ち醞売。かくのごとき悪人、ただ十念に由りて便ち超往を得、あに難信に非ずや。（「信巻」、『聞持記』引用、『聖典全書』二卷九三頁）

このように念仏の道は、愚痴豪賤をよりわけず、功の浅深や行の善悪を問わず、すべての人々に分け隔てなく開かれ、確かな信を決定すれば、臨終が悪相であっても十念念仏によつて浄土に往生できる。如来の本願を信じて念仏する道は、煩惱を離れられないすべての凡夫、殺生を生業とする人々や商人が、たちどころに迷いを超越して成仏する法であると示されている。親鸞が「念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕べ、大般涅槃を証す」（「信巻」、『聖典全書』二卷一〇三頁）と明かすように、「超証」とは、念仏者が如来の本願力によつて横超の金剛心をえて現生で正定聚に住するから、一つひとつ順番に修行して登り詰めていく豎の階位を飛び越え、臨終に大涅槃を証することをいう。したがって親鸞における生死の「超越」の真意とは、本願を信じて念仏申すところ、大悲に抱かれて、すべての凡夫が職種に関係なく公平に尊重され、迷いを超えることができることである。如来の本願力によつて信が定まっているからこそ、たとえ臨終の迎え方が悪くても必ず往生できるのである。



## 五 横超の真意

最後にもう一度、横超の真意に目を向けてみたい。存覚『六要鈔』（『聖典全書』三卷一一二五頁）によると、親鸞は宗曉『樂邦文類』第四<sup>16</sup>に引用された宋代の桐江擇瑛の「横豎二出」の教判を参照し、善導の横超に対して豎超を立てて二双四重判を確立したとされている。また『西方指南鈔』卷下本に「二超ノ中ニハ横超也。……聖道門ノ修行ハ、智慧ヲキワメテ生死ヲハナレ、淨土門ノ修行ハ、愚癡ニカヘリテ極樂ニムマルト」（大正藏八三卷八九六a、『聖典全書』三卷一〇二六頁）とあり、法然に横・豎の二超を見ることもできる。

ではなぜ親鸞は、如来の本願力による救いを「豎」ではなく「横」と表現したのだろうか。この「横」は「如来の本願他力」に込められた真意を明らかにしたい。そこで、親鸞が『無量寿経』の「横截五悪趣」や善導『観経疏』の「共発金剛志 横超断四流」の文をどう受けとめたかを確認したい。まず、親鸞は『無量寿経』の「横截五悪趣」を根拠にして、「行巻」正信念仏偈に「獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣」と記した。『尊号真像銘文』や『一念多念文意』では、こう解説されている。

「即横超截五悪趣」といふは、信心をえつればすなはち横に五悪趣をきるなりとするべしと也。「即横超」は、「即」はすなはちといふ、信をうる人はときをへだてずして正定聚の位に定まるを即といふ也。「横」はよこさまといふ、如来の願力なり、他力をまふすなり。「超」はこえてといふ、生死の大海をやすくよこさまに超えて無上大涅槃のさとりをひらく也。『尊号真像銘文』末、正嘉本、親鸞八六歳、『聖典全書』二の六五四頁）

しかれば、念仏のひとをば『大経』（下）には、「次如弥勒」と説きたまへり。弥勒は豎の金剛心の菩薩なり、豎と申すはたたさまと申すことばなり。これは聖道自力の難行道の人なり。横はよこさまにといふなり、超はこえてといふなり。これは仏の大願業力の船に乘じぬれば、生死の大海をよこさまにこえて真実報土のきしにつくなり。『一念多念文意』、『聖典全書』二の六六四頁）

ここに示されるように、「即横超截五悪趣」とは、如来の本願力回向の信心をうれば、今ここで正定聚に定まり、横に地獄・餓鬼・畜生・人間・天人の五悪趣の束縛が断ち切られることである。横超とは、大いなる本願力の船に乗り、生死の迷いの大海をたやすく横さまに超絶して、当来に浄土に往生できることである。自らの力を頼りにして難行を積み重ね、漸次に五悪趣を断ち切ることを「豎」とし、本願力によって即座に五趣の迷いが断ち切られることを「横」と親鸞は明かしている。

次に、親鸞は、善導『観経疏』の「共発金剛志 横超断四流」を『教行証文類』「信卷」横超断四流<sup>17</sup>、『愚禿鈔』上<sup>18</sup>、『教行証文類』「信卷」法義釈<sup>19</sup>に引用する。「信卷」横超断四流<sup>17</sup>では、こう解説されている。

断といふは、往相の一心を發起するが故に、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。故にすなはち頓に三有の生死を断絶す。故に断といふなり。四流とはすなはち四暴流なり。また生・老・病・死なり。(『聖典全書』九七頁)

ここに示されるように、浄土に往生する一心は如来の願心より發起するから、六道輪廻の迷いを生む因も果も消滅し、欲・有・見・無明の四暴流や生老病死の四暴流も横断できると親鸞はいう。また「信卷」法義釈では、

「共に金剛の志を發して、横に四流を超断せよ。まさしく金剛心を受けて、一念に相應してのち、果、涅槃を得んひと」と云へり。(『聖典全書』二卷九十頁)

と読み、この文につづいて、『観経疏』序文義を引用し、

金剛の志を發すにあらざるよりは、永く生死の元を絶たんや。(『聖典全書』二卷九十頁)

と記している。ここで注目すべきことは、「横超断四流」をめざして、「共に金剛の志を發すること」が重要視されていることである。すなわち、親鸞は、出家者も在家者も共に、金剛の志を發し、如来より金剛の信心を受け取ることによって、生死の根元を永久に断とうと呼びかけている。さらに、親鸞は、

大願清淨の報土には品位階次をいはず。一念須臾のあひだに、速やかに疾く無上正真道を超証す。故に横超といふなり。

〔信巻〕横超断四流积、『聖典全書』二卷九六頁)

と明記する。浄土は、品位階層を問わずにいかなる人々も受け入れてくれる世界であり、極楽に往生すればたちまちに世俗の迷える時間を超えて、大涅槃を超証することができると教えている。

親鸞は、如來の大悲に抱かれた信心の世界を、こう説明する。

おほよそ大信海を按ずれば、貴賤縊素を簡ばず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず……中略……尋常にあらず臨終にあらず、多念にあらず一念にあらず、ただこれ不可思議不可称不可説の信樂なり。〔信巻〕、『聖典全書』二卷九一頁)

ここに尊卑賢愚や出家在家によつて區別せず、老少男女に關係なく、罪の多少を問わず、修行の長短にかかわらず、尋常か臨終かという時節にとらわれず、いつも救わんとはたらきかけている弥陀の本願力によつて、誰もが平等に金剛信心をえて、共に浄土に往生することができると親鸞は明かしている。

したがつて、横超の「横」とは、本願力が人間の迷いを超断し、一切の階位や思い計らいを超えて、すべての人が如來より等しく金剛の信心を恵まれることを意味し、貴賤縊素や罪の多少を問わずに救う如來の本願力を信じて、迷いを共に超えていこうとする真意が込められている。梯實圓は、横超の真意をこう説明する。

それは次第順序を追つて向上していくという理性的な連続性を破る理外の理とでもいうべき法門である。それは、凡夫と仏とを豎に見ていくものではなかった。凡夫をそのまま包摂し、煩惱を転じて仏陀たらしめる本願力のはたらきは、横さまに超えるという言葉がふさわしかった。それゆえ自力断証の思義の法門を豎と呼ぶのに対して、他力救済の不思議の法門を横とよばれたのである<sup>200</sup>。

元来、「豎」はひとすじに通った縦軸、南北を指すのに対し、「横」は、中心線の左右、東西、通常の道理をはみでる、順序を追わないことを指す<sup>21)</sup>。また、「豎」は時間的概念であり、時を積み重ねることや上下関係を象徴するのに対し、「横」は空間的概念であり、水平的な広がりやつながり、傍ら、身分階級などによらないことを表す語である。その意味でも、「横」は、迷いを横に断ちきる本願力の超絶性、人間の思い計らいを超えて救う本願他力の不可思議性、救いの平等性、御同朋の連帯性を象徴している。すべての人々が階層や立場を超えて、決して奪われることのない本願他力の金剛心を等しく恵まれ、共に金剛の志を発して迷いを超えていこうとすることが横超の真意である。横超の「横」とは、垂直方向に自らの力のみを頼りにして迷いの壁を徐々に乗り越えることなく、高次元にいる如来が低次元にいる人間を天上から掬いとることでもない。「横」  
|| 「如来の願力、他力」は、大悲が悩める人々のそばにあることを窺わせる。「横」とは、豎に行を積み上げて迷いをなくす論理を超えて、本願力によって生死の苦悩が超断されることである。すべての人が如来より回施された真実信心に生かされ、水平方向につながって共に救われていく道を「横超」と明示したといえるだろう。

実際、親鸞は、如来の本願による救いをどのように実感しているであろうか。それを指し示す親鸞の言葉がある。

慶ばしい哉、心を弘誓の仏地に樹てて、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。(「化身土巻」後序、『聖典全書』二卷二五五頁)

ここより親鸞にとって本願は、いつでもどこにいても支えてくれている仏の大地であり、思いを流せる大海であった。いかなる時もいかなる処でも如来の本願がすべてのものを支えているからこそ、心を本願の大地に樹てて、如来の慈しみと師の恩に感謝して教えを継承していきたいと告白している<sup>22)</sup>。

大悲の救いのはたらきについて、『無量寿経』卷下にこう説かれている。

大悲は深遠微妙にして覆載せざるはなし。一乗を究竟して彼岸に至らしむ。(大正蔵十二の二七四 a、『聖典全書』一卷四

九頁)

大悲は、深く妙なるものであり、あたかも天がすべてのものを等しく覆い、大地が残すことなくすべてを載せるようである。一乗を究め、生きとし生けるものを等しく安らぎの彼岸に至らせる。また、親鸞は、弥陀の本願をこう讃嘆している。

悲願は喩えば太虚空の如し、諸妙功德広無辺なるが故に。……中略……なほ大地の如し、能く一切の往生を持つが故に。

(「行巻」一乗海積、『聖典全書』二卷五九頁)

このように如来の大悲は、限りなく広がる空のように衆生を包み、果てしなくつづく大地のようにすべての衆生を支えている。横超の悲願は、廣大無辺の慈しみ、生死輪廻を横に断ち切る強さ、一切の階層を超えて救う平等さ、あらゆる存在があるがままいだく包摂、大悲の常住、安心、横につながるぬくもりを表している。「横」は、如来の悲願力が苦悩をかかえた人のすぐ身近にあり、衆生を呼喚し、迷いをばつさり断ち切ってくれることを教えている。自己が仏の限りない慈悲に抱かれていることに気づく時、大悲が自己を支える原動力となり、自らをありのままに慚愧し、ひるがえって仏法を弘め、同朋と共に世の安穩のために努力する姿勢が生まれてくるだろう<sup>230</sup>。

<sup>1</sup> 『日本仏教学会年報』四六号、三四二頁

<sup>2</sup> 『眞宗学』六九号、三二〜四一頁

<sup>3</sup> 拙稿「親鸞における生死の現実」、『眞宗学』一〇五・一〇六号

<sup>4</sup> 拙稿「親鸞における生死の出離(一)―「生死いづべきみち」の意義」、『眞宗学』一二九・一三〇号

<sup>5</sup> 白川晴頭『聖典セミナー―尊号眞像銘文』二二三頁、本願寺出版

<sup>6</sup> 『昭和新修法然上人全集』七九頁

<sup>7</sup> この聖覚法語漢文は『尊号眞像銘文』末、正嘉二年本、高田派専修寺蔵にのみ引用、『聖典全書』二卷六四四頁。正嘉本と建長本との共通点は、聖覚法語を文節ごとに親鸞が引用して解釈する点である。

<sup>8</sup> 迦才『浄土論』卷下、「乗大願船 浮生死海 就此娑婆世界 呼喚衆生 令上大願船 送著西方 若衆生有上大願船者 並皆得去 此是易往也」、

大正蔵四七卷一〇二b

<sup>9</sup> 白川静『新訂 字統』六二五頁、平凡社、諸橋轍次『大漢和辞典』十卷八四二頁、大修館書店

<sup>10</sup> 中村元『仏教語大辞典』九八五頁、東京書籍、『俱舍論』「能永超」、大正蔵二九卷一三七a

<sup>11</sup> 白川静『新訂 字統』五四頁、諸橋轍次『大漢和辞典』十卷八四六頁

<sup>12</sup> 梯實圓『教行信証の宗教構造』二二二頁、永田文昌堂

<sup>13</sup> 『華嚴経』「四暴流中 救溺衆生故」、大正蔵十卷三〇二a、『大毘婆沙論』「四暴流謂欲暴流有暴流見暴流無明暴流」、大正蔵三〇卷三一四c

等

<sup>14</sup> 村上速水『親鸞教義の研究』七三〇七四頁、永田文昌堂。「親鸞が弘願の法をもって「真中の真」「専中の専」と讃えているのは、これをもつて究竟成仏の法と考えられていたことを示すものに相違ないが、すでに「真中の」と云い、「専中の」と云っている以上、余他の法も教法そのものを不成仏の法とする意味ではなく、一往それぞれの価値を認めた上で、更にそれを超越した法としての弘願真宗の地位を考えておられたものと思うのである。」

<sup>15</sup> 藤丸智雄『教行信証』と一乗思想―経典から見ると一乗海釈―二八五頁、『顕浄土真実教行証文類の背景と展開』所収、浄土真宗本願寺派総合研究所、二〇一二年

<sup>16</sup> 『楽邦文類』大正蔵四七卷二一〇a、横出、横堅の表現は他にも元照『阿弥陀経義疏』等にも見られる。例、『摩訶止観』「横堅各有漸頓 若十二門一一而進是名漸進」、大正蔵四六卷一一九a

<sup>17</sup> 『聖典全書』二卷九七頁

<sup>18</sup> 『聖典全書』二卷二九〇頁

<sup>19</sup> 『聖典全書』二卷九〇頁

<sup>20</sup> 梯實圓『教行信証の宗教構造』二〇頁。あわせて殿内恒教授に横超の意義について助言をいただいた。

<sup>21</sup> 藤堂明保『学研漢和大辞典』六六七頁、学習研究社、諸橋轍次『大漢和辞典』六卷五六四頁、『望月仏教大辞典』一卷三三六頁、「横堅」の項

<sup>22</sup> 大谷光真『世のなか安穩なれ 現代社会と宗教』七四頁、中央公論社、二〇〇七年。浄土真宗本願寺派第二十四代大谷光真門主は、なぜ阿

弥陀仏の存在を信じていることができるのかという問いにこう答えている。「阿弥陀仏とは、光(智慧)と命(慈悲)に限りのない仏様という意味です。この世の人間には普通には見る事ができませんが、さまざまの縁によって感じとり信じていることができます。創造主でもなく、この世の支配者でもなく、ただ煩惱をかかえてさまよう人間を真のさとりに導くために働いてくださっています。その存在を信じていると言っても、人間同士の信頼や「明日も太陽が昇る」というような信じ方とは違い、大地に支えられて立っているような安心感、親に抱かれている乳児の安心感に近いものです。こちらがあらを眺めて信じているのではなく、大いなるものに抱かれた安らぎをいうのです。しかし、ただそれだけで満足するというのでは不完全です。その安心感とよるこびから立ち上がっていくことが大事なのです。それはまた、人生が開かれ、

心がときほぐされることでもあります。」  
「わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏こころにいらして申して、世のなか安穩なれ、  
仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。」『親鸞聖人御消息集』(七)、『聖典全書』二卷八三〇頁)